

埋蔵文化財調査室ニュースレター

特集 カマド—台所の歴史—

カマド（竈）とは、火を焚く周りを粘土や石などでドーム状に囲い込んだ加熱調理のための施設です。ドーム状の天井に煮炊き用の土器をはめこみ、住居の内側に開いた口から薪などの燃料を差し入れて燃やし、またそこから空気を送り込んで煙を屋外に流す工夫がしてあります。北海道では7世紀ころの檜文文化の開始とともに堅穴住居に作り付けられた厨房施設としてカマドが普及し、檜文文化が終わる13世紀ころに堅穴住居や土器とともに姿を消します。

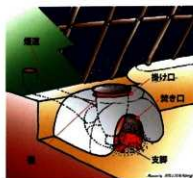
北大キャンパス内（K39 遺跡・K435 遺跡）で発掘される檜文文化の住居址（じゅうきょし）にも必ずこのカマドが作り付けられています。檜文文化におけるカマドの登場と消滅は何を物語っているのでしょうか。本号ではキャンパスの地下に埋もれている台所の歴史の一コマを紹介します。



K39 遺跡恵遠寮地点（サクシュコトニ川遺跡）で発見された第1号住居址のカマド遺構（カマドの天井の掛け口に「釜（かめ）」と呼ばれる深鍋が掛けられたままの状態で見出された希少例。1981-82年発掘。写真はイラスト矢印の方向から撮影。）

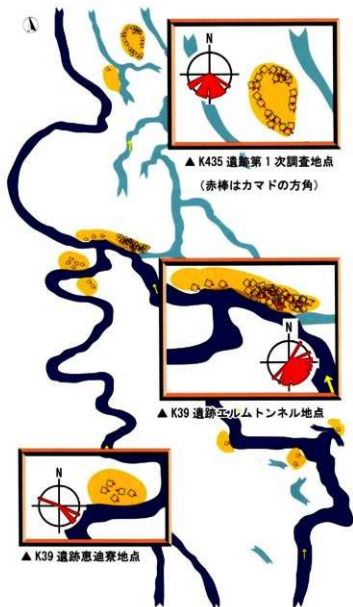
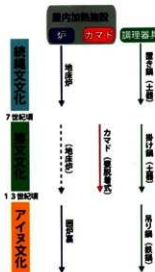
■ カマドの構造と使い方

粘土で形作ったドーム状の本体、その天井に設けた「掛け口」に甕をほめこみ、住居の内側に口を開いた「焚き口」から燃料の薪をくべて、竪穴の壁に穿たれた「煙道」から煙を屋外に逃がします。焚き口から煙道へと空気の流れをコントロールして、カマド内の燃焼部の温度を効率よく上げることができます。炊事・採光・暖房の機能をも兼ね備える伊（縄文文化の地床炉〔じしゅうろ〕やアイヌ文化の囲炉裏〔いろり〕）と比較して、加熱調理に特化した施設です。掛け口には甕が固定されたタイプと掛け外し自由なタイプとがあります。また、甕への火の回りをよくするために、「支脚」で底を支え上げる工夫をしています。



■ カマドの終焉

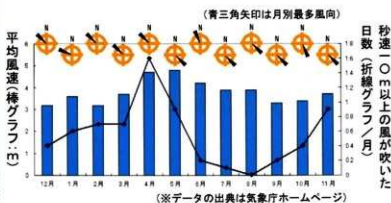
竪穴住居から平地住居へ、土器（深鍋）から鉄製吊り鍋へ、そしてカマドから囲炉裏へ。撤文文化の終わりとアイヌ文化の始まりを告げる考古学的な現象です。



▲ K435 遺跡第1次調査地点
(赤棒はカマドの方向)

▲ K39 遺跡エルムトンネル地点

▲ K39 遺跡恵迪寮地点



■ 季節風と集落景観

カマドは空気をコントロールできる加熱効率の高い厨房施設です。その特性を十分発揮させるためには、煙道からの風の吹き込みによって煙が逆流するのを防がなければなりません。冬季の北西の季節風を避けるかのように、発見された撤文文化の竪穴住居地の多くは、カマドを南東～南側の壁に作り付けています。撤文文化独自の集落景観が出現しました。

